

*Blackboard Learn™*を活用した 「全カリ英語 EGAP Can-do List」開発と運用¹

Development and Implementation of Dokkyo Interdepartmental English Program's EGAP Can-do List Using *Blackboard Learn™*

飯島優雅*

Yuka Iijima

Email: yijima@dokkyo.ac.jp

獨協大学全学共通カリキュラム英語部門（全カリ英語）では、一般学術目的の英語（English for general academic purposes）の教育と、学生の自律的な英語学習を支援する環境整備を目的に様々な取り組みを行っている。そのひとつとして、ラーニングマネジメントシステム（LMS）の Blackboard Learn™ (Bb) に、本学仕様システム「全カリ英語 EGAP Can-do List」を開発し運用を開始した。この Can-do List は、大学 4 年間で身に付けるべき英語力の学習目標をわかりやすく示し、学生の自己評価ツールとして自己省察を促すことを目的としている。本稿はこの Can-do List システムの開発・運用のプロセスを紹介し、第 1 回目の利用と学生アンケート調査結果をもとにその有用性を検証する。1 年生約 1000 人の利用に基づく調査結果から、このシステムが大学で学ぶ英語スキルの全体像の理解を助けるだけでなく、学生個々人が自分の弱点を把握し学習目標を具体化するツールとして有用であることが示された。また学生コメントから今後の改善に関する課題も確認された。

Dokkyo Interdepartmental English Language Program has developed and implemented the *Zenkari English EGAP Can-do List*, a customized system on Blackboard Learn™ (Bb) to improve its education of English for general academic purposes and its environment to support students' autonomous learning. This paper reports on the process of the system development and assesses the usability of the can-do list system as a tool to support students' learning and self-reflection based on the results of the first implementation of the system. Over 1000 students' results and comments on the system indicated that it not only helped students identify their own specific learning objectives but also have a comprehensive view of expected learning outcomes in English skills at the university. Students' feedback also suggested some issues that should be addressed to improve the can-do list system.

*: 獨協大学経済学部

¹ 本稿で報告する事業は、平成 21 年度文部科学省「大学教育・学生支援推薦事業【テーマ A】大学教育推進プログラム」の助成による事業の一部である（事業名：「学士力育成に資する EGAP 英語教育の充実」、取組担当者：岡田圭子経済学部経済学科教授）。Blackboard Learn 導入と Can-do List の開発・運用は、全カリ英語部門コーディネーター教員、授業担当教員、教育研究支援センターおよび教務課をはじめとする関係教職員、SCSK 株式会社の関係者の皆様の協力によって実現したものである。

1. はじめに

獨協大学全学共通カリキュラム英語部門（全カリ英語）は、(1) 基礎的な学術言語技能（スタディスキル）と英語を統合した一般学術目的の英語（English for general academic purposes, EGAP）の訓練と、(2) 自律英語学習者の育成・支援を教育目的とする、学部横断型の共通英語教育プログラムである。現在、全カリ英語では、対象学生（ドイツ語学科、フランス語学科、経済学部、法学部）に合った EGAP 教育をさらに推進し、入学から卒業まで学生の英語継続学習を支援する環境の基盤整備を行っている。本論文ではその取り組みのひとつとして、ラーニングマネジメントシステム（LMS）の Blackboard Learn™

（以下 Bb）上に開発された、本学独自仕様システムである「全カリ英語 EGAP Can-do List」の開発と運用に焦点を当てる。

Can-do List とは、「英語で何ができるか」、を表す能力記述文の一覧である。代表的なものとして、ヨーロッパ共通参照枠（CEFR）の Can-do Statements が広く知られているが、近年日本国内の大学においても到達目標の設定や評価、カリキュラム計画、教材開発に Can-do List が活用される試みの実践研究が報告されている。全カリ英語では、CEFR などの外部指標を参考に、より本学の実情に即した内部指標として、学生にとって学習目標をわかりやすくすることと、学生の自己評価用ツールとして利用することを目的に、EGAP の視点から Can-do List 構築を試みた。

本論文は、導入初期段階にあるこの Can-do List の有用性を学生がどのように評価するかを明らかにし、今後の運用に関する改善点や方向性を示すことを目的とする。まず、全カリ英語 EGAP Can-do List の開発の理念的な背景を概観し、次に Bb 導入の経緯、全カリ英語 EGAP Can-do List の特徴と開発・運用の過程を紹介する。最後に第 1 回目の利用結果と学生アンケート調査結果から、全カリ英語 Can-do List の有用性と改善点を考察する。

2. 「全カリ英語 EGAP Can-do List」開発の背景

平成 20 年に発表された中央教育審議会の「学士課程教育の構築に向けて」（答申）^①では、海外の大学教育改革の動向として「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」に力点が置かれていることを指摘し(p. 8)、国内の大学教育改革の方向性として次のように提言している。

各大学において、学生の学習成果に関する目標を掲げるに当たっては、21 世紀型市民として自立した行動ができるような、幅の広さや深さを持つものとして設定することが重要である。また、各大学教育理念や建学の精神との関連に十分留意して、学習成果として目指す姿を明確に示し、これを学生に浸透させることが必要である。その際、一般教育や共通教育、専門教育といった科目区分にとらわれることなく、また、学生の自主的活動や学生支援活動を含む教育活動全体を通じて検討されるべきである。（第 1 節(3)-(イ)、p.10）

中教審が発表した、学士課程で学生が身に付けるべき学習成果を具体化・明確化するための参考方針は、近年英語教育において見られる、「教え中心」から「学び中心」へのパラダイムシフトの潮流とも呼応している。外国語学習は単なるコミュニケーション能力の習得にとどまらず、学習者が自ら目標を立て、学習を計画し、自己省察をもとに修正を加えながら進めるといった、主体的に学びに取り組む自律性^②と継続的な学習能力の習得も重要視されつつある^③。指導の視点からは、自律した言語学習者を究極の目的とする学習ストラテジー（方略）の指導方法の研究と教育効果の実証研究が進んでいる^④。またその一方で、Can-do を用いた能力指標を活用し、段階的な到達目標を設定したり定期的な自己評価を促したりして、自律した学習者を育成する試みも広まってきた。

本学全カリ英語部門では、2003 年度からストラテジー重視の指導をスキル別の科目（リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング）で行ってきた。継続的に行う科目改善により、学生の認知・メタ認知ストラテジーの活用には向上が見られる^⑤。しかしながら今後 EGAP のアプローチで本学の学生に合ったストラテジー教育をさらに充実させ、入学時から学生の自己省察を促し自律性を高める仕組みを構築するにあたり、大学 4 年間でどんな英語力を身に付けるべきなのか、透明性の高い学習目標や指針を学生と教員に示す必要があることが、コーディネーター教員間で合意された。期待される学習成果が「見える化」され、学生と教員双方が明確なイメージを持つことができれば、各人がそれに即した学習や指導がしやすい。さらに、学生の自己評価結果が、授業担当教員に共有され、学生のニーズに合った指導や授業活動、評価方法へと活かされれば、授

^② 学習者オートノミー、“the ability to take charge of one's own learning”（自分の学習を管理する能力）^⑥は、生まれつきのものではなく、教室内外あらゆる場面で育まれる^⑦とも言われている。

業改善へもつながることが期待される。

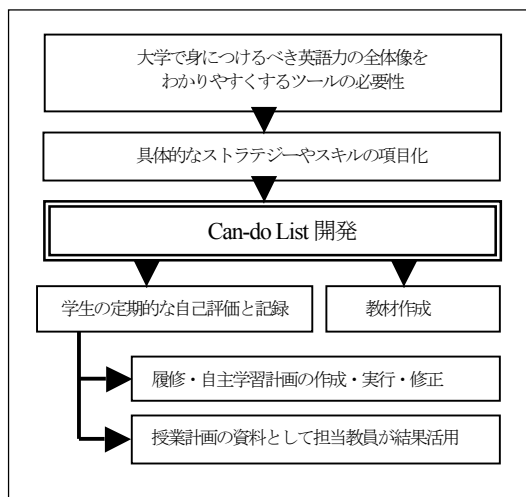


図1 Can-do List 開発背景と結果活用の概要

このことを受け、全カリ英語では 2009 年度秋学期から図1が示す通り、大学4年間の英語学習目標をわかりやすくすることと、学生の自己評価用ツールとして利用し自己省察を促すことを目的に、Can-do List 開発に取り組むこととなった。また運用の効率性を考慮し、LMS上に本学独自仕様のCan-do List システムを構築することとなった。

3. LMS 選定と Blackboard Learn™導入経緯

LMSはMoodleなど無料のものや、各大学が独自開発したもの、商用のものなど多種多様である。本学には「講義支援システム」があり、授業担当教員と学生間の連絡や教材提示などの便利な機能を備えている。一方、教員個々人ではなく、全カリ英語部門のようにコーディネートされた大きなプログラム（年間開講科目数約570コマ、19科目）の教育支援設備、特にCan-do Listのシステム開発と運用を可能にする設備は2009年度の段階ではまだ整っていなかった。

全カリ英語では、全教員（約65人）への連絡、統一教材共有、コーディネーター教員から学生への連絡（統一授業であれば1科目約65クラス）など、授業運営に関わるあらゆる連絡・資料配布がすべて紙ベースで行われており、印刷・配布・郵送・掲示など、限られた人的資源と時間を煩雑な手作業に費やしていたため、カリキュラム運営上非効率であると同時に柔軟性に欠けてしまう側面があった。図2は全カリ英語部門のコーディネート体制の3層構造を簡略化して示したものであるが、2009年度まではコーディネーター教員から学生集団へ直接連絡をし

たり、何かを配布したりすることは不可能であった。

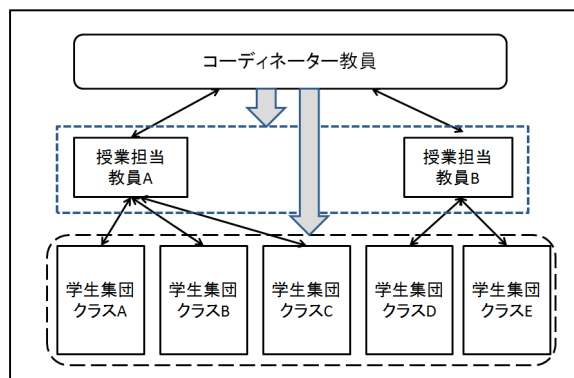


図2 全カリ英語科目コーディネート構造

そこで、LMSの選定にあたっては、第2節で示したCan-do List システムの開発と運用に対応可能であることと、全カリ英語のコーディネート体制とコミュニケーションの双方向性、そして全カリ英語の教育活動支援に不可欠な機能として、次の5点を重要な選定の基準とした。

- ① 「全カリ英語 EGAP Can-do List」をはじめとする本学独自仕様システムの開発がLMS上に可能であること
- ② カリキュラム運営の3層構造に対応し（図2）、コーディネーター教員・科目担当教員・学生間の円滑な連絡が可能であること
- ③ 日本語以外の言語（英語は必須）に対応し、インターフェイスやマニュアルなど外国人教員も使いやすいこと
- ④ 基本的なLMS機能が直感的で使いやすく、学生と教員の創造性を刺激し、利用を促す機能があること
- ⑤ 他大学での導入・利用実績があり導入後の業者のサポート体制が整っていること

学内関係部署からの代表教職員からなる会議が開かれ、いくつか候補となったLMSを上記の選定基準に基づいて比較検討した。その結果、選定基準の⑤については候補のLMS間で大きな差はなかった。④については、Bbには学生間のインターアクションを促すwiki、グループ活動機能、直観的な操作など、教育的な視点に立って開発されたと思われる柔軟な機能が多いとの意見が多かった。また①～③については、Bbのみが対応可能であることが確認され、総合的に高い評価を得たBbを導入することに決まった³。Bbの導入過程は表1の通りである。

³ 株式会社CSKシステムズ西日本が米国Blackboard社の国内代理店として国内でこの教育支援システムを提供している。本学での

表1 Blackboard Learn™導入過程

時期	導入から運用までの流れ
2009年度 秋	<ul style="list-style-type: none"> 必要なLMS機能の確認 LMS選定・Blackboard Learn 導入への学内合意形成
2010年度 春	<ul style="list-style-type: none"> Blackboard Learn 導入・本学仕様の開発 愛称「My DOC (My Dokkyo Online Community)」に担当者会議で決定
2010年度 秋	<ul style="list-style-type: none"> 全カリ英語専任教員担当の1年生クラスでのパイロット運用 運用結果をもとにシステム調整
2011年度 春	<ul style="list-style-type: none"> 全カリ英語7学科全1年生を対象に本格運用開始

4. 全カリ英語 EGAP Can-do List の特徴

日本国内における英語に関する Can-do List は、英検や TOEIC などのスコアが、具体的にどのような英語能力を示すのかを説明するために開発されたものや、CEFR を日本の文脈で活用したもの、一般コミュニケーションの英語力を対象とするもの、各大学の学生やカリキュラム特有の事情に合わせて学習到達目標として作成されたものなど、授業活動やカリキュラムと連動させた実践事例が多数報告されている⁸⁾⁽¹²⁾、その開発目的、内容、活用方法は実に多様である。本学の「全カリ英語 EGAP Can-do List」の特徴は、次の3点にまとめられる。

まず第1に、カリキュラム全体の教育目的である EGAP のアプローチを基盤にしているため、あらゆる専攻分野に共通して必要な言語技能（スタディスキル）をもとに、能力記述文「～ができる」が作成されている。これらの記述文は、アカデミックスキルに関するものをヨーロッパ共通参照枠（CEFR）の B1～C2 レベルや、ALTE、ACTFL、学術目的の英語（English for Academic Purposes）の教育・研究成果などを参考に、筆者を中心とした各科目コーディネーター教員から構成されるプロジェクトチームが本学の学生の実情を考慮して項目を抽出・作成したものである。例えば、「リーディング」の「Basic Reading Strategies」のカテゴリー（表2）には、22の項目があるが、基本的なリーディングストラテジー（1～12番）と、大学生にふさわしい批判的な読み方や姿勢、情報整理に関する記述文（13番以降）が含まれている。このように、学生が専門科目やゼミ、卒業論文執筆などで文献を読む際に必要となる、アカデミックスキルとしての読み方を項目として含め

ている点が、本学の EGAP アプローチによる Can-do List の特徴と言えるだろう。

表2 能力記述文の例「Basic Reading Strategies」

- | | |
|-----|--|
| 1. | 読む前にトピックについて自分が知っていることを考えることができる。 |
| 2. | 読む前に、タイトル・見出し・写真・図表から内容や文章構成について推測することができる。 |
| 3. | 文章の序論・本論・結論の役割を理解することができる。 |
| 4. | 文章をざっと読んで主題や要点を把握すること (skimming) ができる。 |
| 5. | 文章から必要な情報を素早く探すこと (scanning) ができる。 |
| 6. | 文章全体の主張を示す文 (thesis statement) を見つけることができる。 |
| 7. | 各段落の主題文 (topic sentence) を見つけることができる。 |
| 8. | 各段落の主題を説明する例や理由などの支持文 (supporting sentences) を理解することができる。 |
| 9. | 各段落の結論文 (concluding sentence) を見つけることができる。 |
| 10. | わからない単語の意味を文脈から推測しながら読み進めることができる。 |
| 11. | 接続語や代名詞を手がかりにして文章を読み進めることができる。 |
| 12. | 文章の構造 (導入、結論、分類、時系列、原因・結果、比較・対照など) を見分けることができる。 |
| 13. | 文章の内容と構成をアウトラインで示すことができる。 |
| 14. | 文章中にすでに出てきた情報の言い換えや要約を見つけることができる。 |
| 15. | コンセプト・マップやチャートなどを使って文章の内容を図式化し、再整理することができる。 |
| 16. | 事実と意見を区別して読むことができる。 |
| 17. | 筆者の考えや意図、想定されている読み手、文章の目的を推量することができる (i.e., Who says What to Whom for What)。 |
| 18. | 文章の数か所からの情報を関連付けて考えることができる。 |
| 19. | 余白に自分の言葉でメモをしたり、大切な箇所に下線や印を付けて読み進めることができる。 |
| 20. | 文章の重要なポイントを自分の言葉で言い換えたり (paraphrase)、簡潔に要約する (summarize) ことができる。 |
| 21. | 筆者の主張や情報の質を批判的に評価できる。 |
| 22. | 文章の内容と自分の経験や知識を結びつけて理解することができる。 |

特徴の第2点目は、全カリ英語の Can-do List が大学4年間で身に付けるべき英語力の全体像をわかりやすく示すことを目的とするため、科目や学年、または英語力別という区分を作らず、スキルごとに（リーディング、リスニング、ライティング、スピーキング、語彙）、包括的な能力記述文のリストになっている点である。このように包括的なリストにすることで、全カリ英語特有の事情に対応することができる。つまり、入学段階で大きな幅のある学生の英語力（TOEIC 200～900 点台）と学習経験、学科や学生によって異なるクラス指定科目や選択科目の履修状況、そして学生ひとりひとりの英語学習目標の多様性への対応である。大学入学前に英語の訓練をしっかりと受けてさらに高いレベルを目指す学生も、これから気持ちを新たに英語の勉強を頑張りたいという学生も、包括的なリストであれば柔軟に活用できる。

Bb 導入に関するプレスリリースは2010年2月に発表された⁹⁾。

さらに、包括的なリストは英語力習得の特性にも合っていると考えられる。能力記述文に示される技能項目は、この授業を取ればできるようになる、という1対1対応の単純なものばかりではなく、いくつかの科目を履修したり、授業外学習のインプットや繰り返し練習の機会をもつことで、時間をかけて身に付くものである。科目別に区分されていないリストの場合、具体的な科目との直接的なつながりが見えにくくなる可能性があることは否めないが、学生には各項目がおおよそどの科目で学ぶかを示すことでこの欠点に対応している(表3)。

第3の特徴は項目の詳細さと数の多さである。全カリ英語Can-do Listは、各スキルにカテゴリーが3〜7つあり(表3)、能力記述文の項目数はリーディング37文、ライティング42文、リスニング44文、スピーキング41文、ボキャブラリー28文、合計で192項目ある。

表3 全カリ英語Can-do List スキル・カテゴリー・該当科目

Reading Can-do List	主に該当する科目
Basic Reading Strategies	ARS I-II
Newspaper/Magazine Article	ARS I-II ARW III
Academic Text	ARS I-II ARW III
Listening Can-do List	主に該当する科目
Basic Listening Strategies	ALS I
Conversation	ALS I
Interview Program	ALS I
News Report	ALS I-II
Presentation/Talk	ALS I-II
Academic Lecture	ALS II
Note-taking	ALS I-II
Writing Can-do List	主に該当する科目
Formal E-mail Writing	AW I
Sentence Composition	AW I ARS I-II
Paragraph Writing	AW I ARS I-II
Essay Writing	AW II
Speaking Can-do List	主に該当する科目
Basic Conversation	SAC I
Classroom Communication	SAC I
Interview	SAC I
Presentation	SAC I-II PW
Group Discussion	SAC I-II SLAC III
Vocabulary Can-do List	主に該当する科目
Planning Vocabulary Learning	All Courses
Finding Information about Words	
Dictionary Use	
Establishing Vocabulary Knowledge	

例えば山西・廣森(2009)の愛媛大学英语教育センターで開発されたCan-do Listライティングの項目数15と比較すると、全カリ英語のライティング42項目はかなり多い。このような項目数の違いは、Can-do Listの開発や使用目的の違いによるものと考えられる。例えば前者は、ライティング科目の教員間の成績評価のばらつきと、成績評価の妥当性の確保という科目特有の課題解決に向けて開発されたものであるのに対し⁴⁾、全カリ英語のリストは大学4年間で身に付けるべきライティング技能の全体像

(丁寧なメールの書き方から、作文、パラグラフライティング、エッセイライティングまで)を総合的に示すことを目的としている(表3)。さらに、本学のCan-do Listは自律学習支援ツールとして、学生が学習項目を理解しやすいよう、また教員が具体的な授業活動を計画しやすいよう、各項目の記述内容が詳細であることが項目数を多くしている。このことが有用性はどう影響するかは今後検証される必要があるが、導入段階においてはその利用目的を最優先し、項目数をあえて減らすことはしなかった。

以上3つの特徴をもつ全カリ英語Can-do Listの能力記述文は、2010年の春学期と秋学期には一部クラスで試験運用後修正し、2011年度春学期に語彙リスト以外の全項目をBb上に本学独自仕様システムとして搭載され、全カリ英語EGAP Can-do Listが完成した⁴⁾。第5節では、Bb上での実際の利用方法を紹介する。

5. Bb上でのCan-do List運用の仕組み

5.1 インターフェイス

学生はBbにログイン後、「英語学習ロードマップ」のページに入り、Can-do Listのボタンをクリックしてページ移動する(図3-4)。

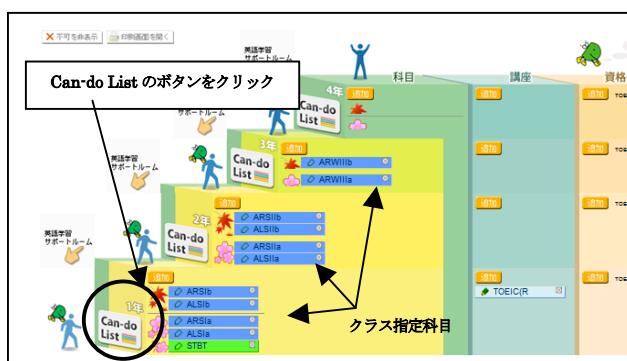


図3 英語学習ロードマップサンプル画面
(ドイツ語・フランス語学科生用)

学生は図4の示すCan-do Listトップ画面でスキル別の項目カテゴリーを選ぶ。例えばリーディングの「Basic Reading Strategies」を選んだ場合、図5のような画面になる。学生は各能力記述文を読み、「Need practice」「Okay」「Good」「Very good」「Excellent」の5段階から自分の力に該当する評価にチェックを入れる。途中保存もでき、すべて終了すると結果が記録されいつでも閲覧できる。次回以降の入力の際も前回の結果を参照にすることができる。

⁴⁾ 語彙リストは2011年度秋学期から運用。



図4 Can-do List トップ画面



図5 Reading Can-do List サンプル画面

5.2 Can-do List 入力時期

学生の Can-do List 入力は、1 年から 4 年まで春学期はじめ、春学期終わり、秋学期末を予定している。入力期間は毎回 2～3 週間と期間を限定するが、学生は自己評価結果をいつでも閲覧できる。導入年度の 2011 年度の 1 年生は、春学期末（7 月）の入力が第 1 回目であった。

5.3 学生自己評価結果の活用

Can-do List を使った学生自己評価結果は、クラスごとにまとめられ、授業担当教員は Bb 上で閲覧できる。図 6 のような画面で、各項目に何人の学生がどのような自己評価をしているかが示される。また、図 7 のように教員は CSV ファイルにダウンロードすることができ、ここにはスキル別でなくすべての記述文と結果が表示される。

このように教員は自分の担当するクラスの学生の自己評価結果が見られるため、学生たちが得意と感じているストラテジーや、苦手と感じているストラテジーを瞬時に把握できる。この情報をもとに、次の学期の教材選択や授業活動、さらには評価方法の

修正など、授業改善につながるような結果の有効活用が期待される。なお、Can-do list はあくまでも自己評価と省察を目的とするツールであるため、自己評価結果は学生個々人の成績には連動していない。

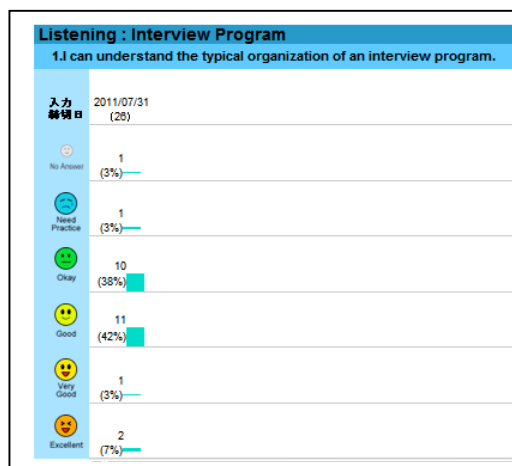


図6 教員画面：クラス結果

	A	B	C	D
1	集計対象:			
2	English(Academic Reading Strategies Ib)	火5		
3	登録学生の合計:26			
4		#####		
5	Reading			
6	Basic Reading Strategies			
7	1.1 can thir	全体人数	26	
8		No Answer	1	
9		Need Pract	2	
10		Okay	14	
11		Good	4	
12		Very Good	3	
13		Excellent	2	
14				
15	2.1 can pre	全体人数	26	
16		No Answer	1	
17		Need Pract	3	
18		Okay	11	
19		Good	6	
20		Very Good	2	
21		Excellent	3	

図7 CSV ファイルへクラス結果ダウンロード

6. 第 1 回 Can-do List の入力実施

学生の全カリ英語 EGAP Can-do List による英語力自己評価の入力第 1 回目は、2011 年度春学期 7 月 4～20 日(延長 21 日～31 日)の期間に行われた。この入力期間や手順の連絡は次の 3 通りの方法をとった。

- (1) My DOC トップページ「全カリ英語 履修中の学生の皆さんへ To Zenkari English Students」に「Can-do List 入力・課題提出」お知らせを掲載し、詳細情報を「全カリ英語履修中の学生へのおしらせ」のページに掲載

した(図8)

- (2) ニュースレター「My DOC 学生通信」を作成し、クラス指定の ALS I (ドイツ語学科・フランス語学科・法学部 3 学科クラス) と SAC I (経済学部 2 学科クラス) の授業で配布し、1 年生全員への周知を図った。また ALS I 授業は CAL 教室で行われているので、授業担当教員と教育研究支援センター外国語教育支援課の教室アシスタントの協力を得て、実際に My DOC 上で Can-do List に回答し課題を提出するまでの手順のデモを行った。
- (3) 7 月 20 日の入力最終日までに課題未提出だった一部の学生には、試験的に Bb のウォーニング機能を使って未提出を知らせ、延長期間中の提出を促した。

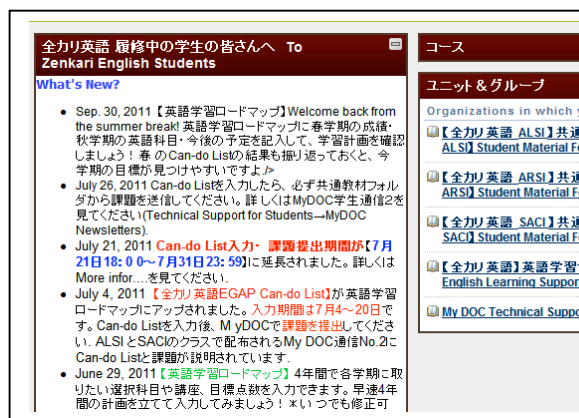


図8 My DOC トップページで課題通知

上記の 1400 人を超える学生への一斉連絡、課題送信、課題回収は、すべてコーディネーター教員 1 人(筆者)が行った。その結果、1 年生で実際に Can-do List の入力と課題を行ったのは、ALS I のクラスで 565 人(履修登録者数 649 人、87.05%)、SAC I のクラスで 525 人(履修登録者数 758 人、69.26%)であった。SAC I クラスの学生の比率が若干少ないのは、CAL 教室でのデモがなくニュースレターと My DOC 上での指示のみだったことが影響しているかもしれない。しかしながら全体としては 1090 人の学生が課題を提出し、77.46% の全カリ英語 1 年生が第 1 回目の Can-do List を体験した結果となった。

7. Can-do List システムの有用性検証

7.1 学生アンケート調査

この全カリ英語 Can-do List システムは「大学 4 年間で学ぶ英語スキルの全体像の把握」「学習目標の明確化」「英語力の自己評価」を助けるツールとして開発されたが、初めて利用した学生から見たこのシステムの有用性を検証するためにアンケート調査を行った。対象は全カリ英語 1 年生 1407 人で、回答者数は 1090 人だった。学生は Bb 上で Can-do List 入力後、ALS I または SAC I のコースページに入り、「テスト機能」を利用して作成されたアンケートに答えた。

7.2 結果と考察

アンケートでは Can-do List がそのツールとしての役割が実現できたかどうかと、入学前の学生の Can-do List 使用経験を明らかにするため、次の二択質問 2 つと自由記述式質問 1 つを尋ねた。二択質問に対する全体の回答は表 4 の通りであった。

表 4 Can-do List 課題アンケート結果

質問	はい	いいえ	無回答
1. 全カリ英語 Can-do List に答えてみて、大学で練習する具体的な英語スキルのイメージを持つことはできましたか。	859 人 78.8% (ALS I: 77.2%, SAC I: 80.6%)	145 13.3% (ALS I: 12.2%, SAC I: 14.5%)	86 7.9%
2. 獨協大学に入る前に、英語に関する他の Can-do List を使ったことはありましたか。	30 2.8% (ALS I: 2.5%, SAC I: 3.0%)	972 89.2% (ALS I: 86.5%, SAC I: 92.0%)	88 8.1%

質問 1 に対する回答を見ると、78.8% の学生が大学で学ぶ英語スキルのイメージを持つことができた。さらに質問 2 への回答から、なんらかの Can-do List を入学前に利用したことがある学生はわずか 2.8% であることがわかった。これは 90% 近い全カリ英語 1 年生にとって、今回の Can-do List 入力課題が、TOEIC などの点数に表れない「英語で何ができるか」について初めて自分の実践的な英語力を振り返り自己評価を行なった貴重な機会であったことを示す。これらの質問への回答から、この Can-do List システムが、具体的な学習目標と大学 4 年間の英語学習の全体像把握を助けるツールとして、その役割を果たすものとして有用であると言ってよいだろう。さらにこの点は次に紹介する自由記述式質問へのコメントにも表れている。

全カリ英語の Can-do List について感想や質問を尋ねた自由記述式質問については 326 人の学生からコメントが寄せられたが、そのうち 227 人が Can-do List による自己評価について「便利」「Can-do List をまた使いたい」「目標が明確になった」など、自己評価ツールとしての有用性を示す表現を使ったコメントを寄せている。表 5 に代表的なものを紹介する。

表 5 自由記述質問と回答

質問: 全カリ英語の Can-do List について感想や質問があれば書いてください。こんな使い方もできるよ! という提案も歓迎します。今後 My DOC 上や My DOC 通信などで質問への回答を掲載したいと考えています。
<ul style="list-style-type: none"> • こんな風に英語を学習できるとおもっていませんでした。さすがに語学の獨協といわれる所以がわかりました。これからこの機能を使って英語のスキルを上げていきたいです。 • can-do-list に答えて、大学で求められる英語の能力がわかった。また、自分がどこができないのかもわかったので、そこを重点的にやっていきたいと思った。 • これから自分がやるべきことや目標が明確になるという点でこのリストは非常に役に立つと思った。定期的に更新していきたい。 • こういう自分の英語のどの部分が得意で、どこが苦手かを詳細に把握するためのシステムを使ったことがなかったので大変参考になりました。 • 全カリ英語の Can-do List の質問に答えていくうちに自分の弱点や克服しなければならない点が明確になりました。また、この MyDOC のおかげで、1 年生のこの時期から、獨協大学で英語を 4 年間、学ぶ上での目標や学習イメージを持つことができました。今後も、定期的に利用し、自分の目標を定め、確認しながら、英語学習に励んでいくという気持ちになりました。 • Can-do List を用いることで、今の自分の英語力を客観視できるのでとても良かったと思います。次にチェックするときには自分が苦手と感じている項目が何だったか見比べることが出来るのも凄く今後英語を勉強していく上でプラスになると感じました。 • Can-do リストをやってみて、自分は Reading が苦手ということに気がついたので、4 年間を通して Can-do リストが「Can」ばかりになるように努力したいと思います。 • 非常に細かい内容で分かれていますので、自分の得意とする分野の盲点や、不得意とする分野を見つけることができるのでこれから十分活用していきたいです。 • 英語は自分が思っていた以上に大変ということがわかりました。ただ単語を読んで理解するだけではなく、そこからなにかいいたいのかなど、理解しながら英語をやらなきゃいけないのにびっくりしました。どうやって英語で自分の考えを伝えることや、文の要約をできるように教えてほしいです。 • Interview や Presentation などはまだやったことがないし、自信がなくて Excellent はなかなかつけられないけれど、様々な項目があるので、まめに確認すればできるようになりたいという目標を明確にすることができ、学習が効率的になると思う。優れたシステムだと思うのでなるべく頻繁にアクセスするよう心掛けたい。 • 課題が出て初めてこういう機能があることを知りました。使ってみて、自分が今どのくらいのレベルの英語力があるのか知ることができ良い機能だと思いました。また、学生生活 4 年間分を見れるので自分の成長もみることができ、英語の学習にやる気を出せたいと思います。実際に使ってみて次はもっと Excellent をつけたいと思いました。 • 自分がこれから身につけてはならない英語の技能が理解できた。と同時に足りない部分の多さを痛感した。これから計画をきちんと立てて、英語学習に取り組んでいきたい。 • この Can-do List によって、英語に対する向上心がとても上がりました。

「大学で学ぶ英語がどんなものかわかった」「今後

の英語学習の目標が見つかった」など、コメントの約 70%が、この Can-do List システムが、開発の趣旨である「学習目標をわかりやすく具体的にすること」と「4 年間の英語学習全体像把握」のツールとして有用性が高いことを示す結果となった。さらには学生の主体的な英語学習へのモチベーション向上を示すような内容のコメントとして、「定期的に活用し目標を確認したい」「次はもっとよい結果になるように頑張る」「自分の弱点が明確になった」といったものも多く、Can-do List が「英語力」という漠然としたものの幅の広さや奥深さを具体的に知るきっかけとなったようである。

このように全カリ英語の自律学習支援の一環としてこの自己評価ツールが役立つ可能性が高いことが確認された一方で、まだ使い方がよくわからない (8 人)、質問項目が多過ぎる (11 人)、まだやったことがない項目についてはどう答えればいいかわからない (10 人) というコメントもあった。次回の Can-do List 入力時には再度利用目的や他の学生からのコメントを紹介するなどして、学生個々人の効果的な活用を促す必要があるだろう。また、自己評価は主観的なものであることから、学生が自分の本来の力を過大評価したり、過小評価したりする可能性もある。大学入学前に Can-do List を使ったことがない学生が約 1000 人 (全体の 90%) 近くいるという今回の調査結果は、自己評価の仕方についての指導も考慮に入れて今後 Can-do List の運用をしていく必要があることを示唆する。

Bb 上での操作等に関するコメントとしては、「使い方がいまいちよくわからない」「画面表示のモジュールの説明がわかりにくい」「説明書が英語だけでなく日本語もほしい」という内容のものが数件あった。ひとつめのコメントについては、今回は Bb の基本機能である「テスト機能」を使って今回のアンケート回答の提出を行ったため、「テスト」「課題」といった教員からの指示にある単語と、Bb 上の単語の違いからわかりにくいところがあったかもしれない。その他については、学生が様々な Bb の機能を試していることを示しており、今後さらに使い勝手が悪いと感じるのはどんなところかを丁寧に調べ学生の質問に答えていく必要があるだろう。Bb 上にはテクニカルサポートの wiki があり、ここに Can-do List 利用法などを含め、利用者への有益な情報が蓄積されていくことを期待する。

8. 結論

本稿では全カリ英語部門が Blackboard Learn™ を活用した「全カリ英語 EGAP Can-do List」システム

の開発と運用のプロセスを紹介し、導入年度における 2011 年度入学生の第 1 回目の利用結果を報告した。利用状況と学生アンケート調査結果から、英語でできることとまだできないことを自己評価することにより、大学 4 年間で身につけるべき英語スキルの全体的かつ具体的イメージが約 8 割の学生に伝わったことが確認され、このシステムの有用性の高さを示す結果を得た。また、「この Can-do List をもとに自分の英語力の弱点を克服できるよう勉強したい」という学生評価が多く、自主学習の方向性を見つけるためのツールとしてもこの自己評価システムの利用価値は高いと言えるだろう。

さらにアンケート結果から、今後の運用上の改善点も確認された。まず、全カリ英語の 9 割近い約 1000 人の学生が初めて Can-do List を使ったということがわかり、自己評価方法の指導の必要性が指摘された。また、コメント数は少ないものの Can-do List をうまく使いこなせていないと感じている学生や、まだ習ったことがない項目についての自己評価の仕方に悩む学生もあり、今後ニュースレターで周知をしたり、授業内で Can-do List に関するディスカッションを盛り込んだりできるだろう。また英語学習サポートルームでの対面式英語学習相談においても、Can-do List を活用した英語学習計画を導入することで、学生たちの効果的な活用を促すことができるかもしれない。今後の運用に向けて、有機的に学内の英語学習支援施設や授業と Can-do List をに関連させる工夫を検討し、学生にも教員にもわかりやすいシステムとして整えていきたい。

最後に、Can-do List の有用性の検証は今後も様々な側面から継続して行われる必要がある。今回は第 1 回目の入力結果に基づく有用性の検証であったので、2 回目、3 回目と回数を重ねた際の利用状況も追跡調査が必要である。また、学生の TOEIC 点数などの外部指標と学生の自己評価の相関から、Can-do List の妥当性を検証し項目を精査していくことも今後の課題であろう。さらには、今回は学生利用者の視点から検証を行ったが、各授業担当教員が Can-do List クラス結果をどのように解釈し、授業活動や評価方法改善につなげているかなどを調査できれば、このシステムの FD の側面からの役割と有用性を検証でき、教員への支援体制を改善するための資料となる。

全カリ英語 EGAP Can-do List はまだ導入初期段階であるが、今後カリキュラムの根幹として科目間の縦と横の有機的なつながり形成、学習活動計画、教材選定、評価などの、透明性の高い指標として活用されるものである。今後も継続的に見直し改善を加えていきたい。

謝辞

本論文に対し貴重な助言をくださった査読者の皆様と岡田圭子先生に感謝の意を表する。

参考文献

- (1) 中央教育審議会：“学士課程教育の構築に向けて（答申）”（2008.12）
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2008/12/26/1217067_001.pdf
- (2) 竹内理：“学習者の研究からわかること一個別から統合へ”小嶋英夫・尾関直子・廣森友人（編）“成長する英語学習者”第 1 章、pp. 3-20、大修館書店（2010）
- (3) Holec, H.: “Autonomy and foreign language learning,” Oxford: Pergamon Press (1981)
- (4) Sinclair, B.: “Learner autonomy – The next phase?,” Sinclair, B., McGarth, I. & Lamb, T. (Eds.): “Learner autonomy, teacher autonomy – Future directions,” pp. 4-14, London: Longman (2000)
- (5) 尾関直子：“学習ストラテジーとメタ認知”小嶋英夫・尾関直子・廣森友人（編）“成長する英語学習者”第 4 章、pp. 75-103、大修館書店（2010）
- (6) 飯島優雅・菊池武・辻田麻里：“Academic Listening Strategies I コース改革—ストラテジー重視のリスニング訓練を目指して”獨協大学外国語教育研究、29 号、pp. 37-68（2011）
- (7) 獨協大学・株式会社 CSK システムズ西日本：プレスリリース“獨協大学の「全学共通カリキュラム英語プログラム」に、CSK システムズ西日本提供のシステム導入が決定”
<http://www.csk.com/press/2010/press/20100205.html> (2010.5)
- (8) 廣森友人：“愛媛大学版英語運用能力判断基準（Can-do リスト）の精緻化と妥当性の検証”ARELE、20 巻、pp. 281-290（2009）
- (9) 山西博之・廣森友人：“適切な指導と評価を目指した、愛媛大学共通教育「英語」カリキュラム開発への取り組み—英語運用能力判断基準（Can-do リスト）の開発とその意義”ARELE、19 巻、pp. 263-272（2009）
- (10) 阿野幸一・ベッツ、ロバート・福田浩子・永井典子・岡山陽子・佐々木美帆・上田敦子：“ヨーロッパ言語共通参照枠に基づく英語能力記述尺度：茨城大学総合英語プログラムにおけるケーススタディ”人文コミュニケーション学科論集、6 号、pp. 1-18（2007）
- (11) 長沼君主・宮嶋万里子：“清泉アカデミック Can-do フレームワーク構築の試みとその課題と展望”清泉女子大学紀要、54 号、pp. 43-61（2006）
- (12) Schmidt, M.G., Naganuma, N, O'Dwyer, F, Imig, A and Sakai, K. (Eds.): “Can do statements in language education in Japan and beyond –Application s of the CEFR 日本と諸外国の言語教育

における Can-do 評価” Asahi Press (2010)

(2011 年 9 月 30 日受付)

(2011 年 12 月 21 日採録)